

「島ぐるみ」から「オール沖縄」へ

——櫻澤誠『沖縄現代史』が問うもの——

謝花直美

梅雨があけた直後のかっと照りつける炎天下で、6月19日「在沖米海兵隊の撤退などを求める県民大会」が開かれた。殺害された女性の死を追悼する集会で、学生が壇上に立つまでの葛藤にふれた。「彼女の死を政治利用しているのでは…」。追悼のための集会で、米軍基地撤去にふれること。喪の気持ちとともに政治的な発言を行うことはそぐわないのではないか。学生は、深夜まで悩みぬいて、決意を固めたと説明した。「事件の政治利用」。自民党や公明党が、事件と米軍基地を関連づけ県民大会を開くことを批判してこう表現していたためだ。会場の奥武山陸上競技場は、歌手の古謝美佐子さんが我が子への愛情を込めた「童神（わらびがみ）」を歌うと、多くの参加者が、涙を流しながら聞いていた。約6万5千人が集まった県民大会の光景は、県民大会に参加すること、政治的な意思を集会という直接行動が、沖縄の社会ではごく当たり前のことだと示していた。一票を投じて選んだ政治家たちが、米軍基地によって生存を脅かされてきた沖縄の人々をなんら顧みない時に、直接行動の県民大会を開催して、沖縄の人々は意見を表明してきた。亡くなった女性の追悼、海兵隊撤去の要求、沖縄の戦後の歩みと将来を考えること。沖縄の今を生きるためには必要なことだ。事件を自分の痛みとして受け止め、沖縄で生きるために何をしなければならないか、その行動が、政治そのものといえるだろう。冒頭の学生の発言は、沖縄戦後、米軍占領下、人々が抵抗運動によって、米軍の圧政を跳ね返してきた沖縄の戦後史をどう理解するかとともに、同時代史的に生きていない若い世代にいかにつづいていくのかという課題を照らし出していた。

櫻澤氏の著書『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から『オール沖縄』まで』は、住民の抵抗史を軸に沖縄の戦後史が記述されて先行研究を踏まえて、経済、文化という分野も合わせて記述することで、沖縄の人々の政治的選択、行動（あるいは表面的に行動しないこと）の背景にどのようなことがあったのか、立体的な記述を試みている。沖縄の人々の抵抗運動が、街場に立つような運動が衰退していた本土から、「沖縄を先頭に」という表現に見られるように、沖縄の人々の特性でもあるかのように本質化されてきた。沖縄の人々の運動もまた、何かのための運動として利用されかねない現状がある。櫻澤氏はからまった糸を解きほぐすように、丁寧に、運動が生まれでてきた状況を、政治、経済、文化というフィールドを横断し、一枚いちまい解きほぐしていくような記述を積み重ねていく。最初から強い抵抗の主体として沖縄の人々がいたのではなく、米軍占領下という厳しい中で、ぎりぎりの妥協をしながら、復興、自治を求めて生き延びようとした人々の姿を記述する。例えば、沖縄教職員会（1952年）結成では、会長の屋良朝苗は、馬小屋校舎と呼ばれた貧しい学校施設を充実のため、全国行脚を重ね校舎建設運動を展開していた。全国から建築のために寄せられた浄財を米軍は受け取らず、「愛の教具」として学校備品購入に充てさせた。政治色を排除した教職員組合の「島ぐるみ」という運動方

針は、とうとう1967年の公務員の政治運動を禁止した教公二法闘争を契機とし終わり、革新化したという。同年、教職委員会が中心となった「沖縄県祖国復帰協議会」が、全軍労の加入とともに「軍事基地反対」を方針とし、沖縄の保守勢力をも敵対勢力とした。「島ぐるみ」で表現された運動が、最大動員の妥協点を見出しながら続けた、民族運動の終焉を告げることだったという。

前述の教職員組合や「復帰」運動において、「島ぐるみ」という言葉を用いて、超党派の取り組み、政党政治の共闘態勢を言及することには、この言葉がもつ一つの側面だけが照射されているのではないかと考える。政党政治に限った「島ぐるみ」への注目は、ともすれば、冒頭の県民大会での大学生の発言のような葛藤は「島ぐるみ」からこぼれ落ちてはしまわないか。「島ぐるみ」が、個々の人々の心理的な内面、一人ひとりの行動そのものも取り込む言葉だと考えられるからだ。「島ぐるみ」とは、米軍基地が起こす分断を一人ひとりが自らの行動で生活の中から乗り越えようとする態度をも表していたのではないだろうか。

「島ぐるみ」闘争という名の起源は、1956年のプライス勧告に反対する「四原則貫徹大会」が各地で開かれた際に、各地で連日万単位の人々が集ったことに由来する。戦争からの復興途上だった那覇市では、万余の人々が集まる場所がなく、場所は当時もっとも広がった那覇市の那覇高校のグラウンドが使われた。「米軍諜報部隊に監視されないように」という言葉がリアリティをもち、夜間に開かれたことがその日常の緊張感を裏打ちして現在まで伝えていた。しかし、米軍の弾圧によって「島ぐるみ」は分断され、保守が切り崩され、闘争はしぼんでいく。しかし、米軍に対して万余の人々がともに立ち、主張したという人々の初めての経験は、大きな意味をもっていたに違いない。以降、沖縄の人々は繰り返し、直接の行動で政治的スタンスを主張したのだから。

1995年、「米兵による暴行事件」を巡っては、事件発生から約1カ月半後の10月21日に、約8万5千人が参加し県民大会が開かれた。会場となった宜野湾市海浜公園は、後方に労組の旗が林立し、一般参加者用の場所として壇上に近い場所が提供された。大会開始前の早い時間から、なにかにこらえるようにして立ち尽くす若者たち、女性たちの姿がひときり目を引いた。壇上では当時の大田知事が、少女を守れなかったことを謝罪した。県民大会を支持する枠組みが超党派で開かれることは、沖縄の意志が一枚岩であることを、国内外へ伝えるために大切だ。しかし、県民大会は同時に、その場所に個々が立つことが、沖縄の歴史と向き合い、学び取り、他律的に沖縄の行く方向を決めようとする力に、意志を表示する場となった。「島ぐるみ」の過去の経験を当時に呼び戻しながらも、1995年の大会は、施政権返還後の最大規模の大会として、政治意志の表明をする新しい形のスタイルをつくりだした。

2007年、「教科書の検定意見撤回を求める県民大会」では、歴史修正主義者たちの「集団自決（強制集団死）」の軍命記述への攻撃が始まっていた。危機を抱いた沖縄戦体験者は、検定結果が出た3月末からすぐさま声を上げ始め、小さな集会が続き、やがてうねりとなって9月29日の大会へつながっていった。人々が思いをひとつひとつ積み上げるようにして意思表示していった大会だった。この県民大会は、参加決定は最終までもつれたが、仲井真知事（当時）が参加したことで、超党派の枠組みが結成された。と同時に、県外のメディアからは、沖縄戦でまとまる事が出来ても、米軍基地問題では一枚岩になることができないと、繰り返し指摘された。

超党派で現在の政治スタンスに影響を及ぼさない沖縄戦ならまとまることができるが、米軍基地問題では、基地経済（当時においても時代錯誤的認識であったにも関わらず）に依存しているから、沖縄は一枚岩になることはできないのだという指摘を言外に含んでいた。沖縄戦の死者を悼む思い、沖縄戦が原点となる基地問題は、沖縄の人々の経験から切り取られ、理解されやすいように理解されていた。問題を沖縄の場所で噴出させた日本という国のあり方を問うことなしに、語り手が透明な存在となって語ることで、問題を沖縄という当事者に丸抱えされるという差別的視点をも潜んでいた。

「島ぐるみ」の闘いは、現在「オール沖縄」という名称を新たに得て、翁長知事を支援する組織として活動する。この新しい言葉が放つ力について考えたい。当所、「島ぐるみ」という1956年に生まれた言葉を用いられていたこの取り組みは、より沖縄の人々が、一つになろうという意志が込められた言葉と言える。1995年の超党派の県民大会が成立している、沖縄側にとっても、県民大会の成功をはかる尺度になっていた。しかし重要なことは、櫻澤氏が指摘したように、対日本との関係性を問うという思考が、県民大会を通して共有され広がってきたといえる。基地提供義務によって沖縄に米軍基地を起し続けているのは誰なのか。沖縄の人々が自らの体験によって記述した沖縄戦の認識を、書き換えさせようとしているのは誰なのか。1956年の「島ぐるみ」は米軍という圧政を跳ね返すために、沖縄の人々が団結する必要性を示した言葉だった。比較して「オール沖縄」という名乗りは、対峙しているものが、日本であるということをはっきりと明示している言葉である。沖縄の人々にとっては、「琉球処分」以来、日本に同化することが一つの目標だった。「島ぐるみ」闘争との大きな違いは、「ヤマトを相対化する」という立場が多くの人々に広く共有されるようになったことである。長年の同化のはてに「ヤマトを相対化」することは、名乗る恐怖とともに、足下が崩れるような感覚をも抱くことでもある。それを補強するのが「オール沖縄」という語感に示される意志だろう。政治のフィールドだけでなく、文化的な側面のしまくとぅば復興運動が、近年盛り上がっていることとも関係がある。相対化するために、今一度、私たちが誰なのか、を問うことでもある。それは、沖縄戦問題、米軍基地問題と、問題が、人々の経験を、他者の視線を介して、バラバラに理解することではなく、再度、一人ひとりがその問題の中をどう生きていったのかを問うことでもある。

櫻澤氏の著書が示すのは、「島ぐるみ」、保革の対立を通して、「オール沖縄」が生まれてきた政治を、経済、文化状況とも関係付けながら書くことである。沖縄で何が起こってきたのかを淡々と記述するかのようと思われる同著が、現在に時間に出現したことは大きい。

ネットの空間の裏づけをもたない沖縄に関する情報が現実社会に浸潤しているような現状で、前述のような沖縄の動きは攻撃にさらされている。単純化された二項対立にとらわれず、同書を開いた人が歴史的な事実にあふれ、自らが判断してほしいからだ。と同時に、沖縄に生きる私たちには、凝縮された1行1行の行間に埋もれた沖縄の戦後史を凝視し書き続けることが課題として投げ返されている。

